

合もあるのだろうが、ラテンアメリカという表現も散見される。第1章でていねいに説明されているとはいえ、なじみのうすい地名が頻出するなかで、評者のような不注意な読者は混乱してしまうかもしれないと感じた。

とはいえ、それは裏を返せば、大方の日本人にとってなじみのうすい地域を分かりやすく説明するには多大な労力が求められることを意味する。本書の執筆者の多くは、中部アメリカのなかでも特定の国・地域を主たるフィールドとしている。たとえば評者が地誌の授業でとりあげることの多い北アメリカは、先住民やフランス語話者の存在、あるいは連邦国家ならではの制度的な複雑さなどはあるものの、域内の特定地域をフィールドとする研究者が北アメリカ全体を俯瞰的にとらえることは比較的容易である。それに対して中部アメリカは、大陸と島嶼、独立国と非独立地域、さらには（旧）宗主国の違いにもとづく多様な言語や文化、社会や経済などに特徴づけられる地域である。強いていえば、オセアニアが似たような性格をもっていると考えられるが、オセアニアでは地域の大国としてオーストラリアが一定の存在感を発揮しているのに対して、先に述べたように中部アメリカにはそうした国が存在しない。これらのことをふまえると、中部アメリカを俯瞰できる本書は非常に貴重であることが分かる。多くの人が本書を手に取り、中部アメリカを身近に感じ、その魅力に気づいてもらえることを期待したい。

(大石太郎)

**伊藤達也・小田宏信・加藤幸治編著：『経済地理学への招待』** ミネルヴァ書房、2020年6月刊、370p., 3,500円（税別）

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、大学でも遠隔授業が続いている。評者も講義系の

授業は動画配信にしているが、バリアフリー対応のため字幕を整備する必要に迫られることになった。その作業をする中で、自分の説明を見返すことになり、これまで地理学の概念の説明がいかにか曖昧であったのかを思い知らされることになった。評者の勉強不足もあって、毎回の授業で地理学の魅力を伝えるのに四苦八苦する毎日である。

そうした中で、本書は経済地理学の魅力を伝えるべく刊行された待望のテキストである。本書は同じ出版社の『人文地理学への招待』の姉妹編として刊行され、「経済現象を空間的側面や地域性から明らかにする」という経済地理学の命題に対し、産業地理学の視点に加えて、環境への視点の確保、地域への視点の復権、そして人間の再評価の視点から明らかにしようとする。はしがきにもあるように、本書が経済地理学のテキストであることから、面白そうなテーマであっても、経済地理学との体系との関係を意識して扱うことが意識されている。加えて、古典的な理論と事例説明のバランスがとられており、すべての章において難解な理論の説明に終始することもなく、単なる事例集にもならないよう限られた紙幅の中で工夫がなされている。

本書は4部19章（+序章）、14名の執筆者で構成されている。編者はこの分量と構成について、通常のテキストであれば授業回数に合わせた15章程度で構成されるが、本書では経済地理学のテーマの多様性と、章やテーマを選択することを可能にすることによって、説明の多様性を確保するためであると述べている。4部から構成される各章の内容は、必ずしも設定された各部のみに収まるものではなく、取り上げるテーマや空間スケールによりモザイク状の構造になっているため、読者は各章を行き戻りつつ本書を読み進めることができる。その手助けとして、本書では重要なキーワードが初出の見開きページで解説される

とともに、他の章でも説明される重要概念に関して登場するページ数が示されている。このことにより、各章の説明が経済地理学の細分化された分野にとどまることなく、関連を持った全体として理解できるよう工夫されている。隣接分野でも登場するようなキーワードではなく、地理学用語の解説に心がけていることを随所で読み取ることができ、初学の読者の手助けとなっている。

それでは各章の内容を、部ごとに簡潔に紹介していく。序章（伊藤達也）では、経済地理学の成立から発展までが簡潔に整理されるとともに、その状況の変化を①東京一極集中と世界都市、②地方都市の限界、③グローバリゼーションと東アジアの勃興から説明する。これらの諸点は次章以降の項目の道標ともなっている。

第Ⅰ部では、現在の日本の経済地理学会を牽引する論客によって、「経済地理学とは何か」といった根本的な内容が説明される。第1章（小田宏信）「経済立地の理論」は、冒頭からきわめて濃厚な内容となっている。チューネンからクリスタラーに至る立地論、集積と分散の理論に至る経済立地のコア概念が、平易かつコンパクト（わずか17ページ！）に、しかしながら全く説明の質を落とさず、その後の諸議論と結びつけて解説される。第2章（小田宏信）は、地域経済の発展メカニズムについて、20世紀の欧米の論者による地域経済理論と地域開発理論を紹介しつつ、そうした国土・地域政策が先進資本主義諸国では曲がり角にあり、別の形での地域経済振興策の展開に言及する。第3章（加藤幸治）は、サービス経済化が需要次元と供給次元から進行してきたことを指摘し、需要次元のサービス化がもたらす地理的インパクトをわかりやすく説明している。第4章（中澤高志）は、ライフコースの重要な一部分をなし、職業に関する経験の連鎖である「キャリア」の空間的軌跡について、高度経済成長期、安定成

長期、低成長期の日本の労働市場に即した解説を行っている。第Ⅰ部では少々難易度の高い経済地理学の主要理論や方法論をわかりやすく紹介するなかで、各テーマへの関心を深めさせるとともに、より専門的な文献への誘導がなされている。

第Ⅱ部「グローバル化と地域経済」では、現代社会のグローバル化の流れと、それに対抗する地域経済の側面が解説される。第5章（小田宏信）は、企業内地域間分業の展開を概観した上で、製造業のグローバル化と生産ネットワークを説明しており、後述の第11章の内容と合わせて読み進めると効果的である。第6章（池田真志）は、流通の問題としてグローバルなサプライチェーンの概念を紹介するとともに、食品と工業製品の事例からグローバル化の弊害を指摘する。第7章（水野真彦）では、経済活動を左右する「制度」の概要説明と、そこから生み出される地域文化や産業風土が解説される。第8章と第9章では同じ執筆者（小原丈明）により都市の諸問題が概説される。第8章ではインナーシティ問題、第9章では世界都市の出現と都市ネットワークの話題について、古典的な理論の紹介から最新のデータを踏まえた事例分析までなされている。第Ⅱ部で扱われる内容には若干の凸凹感があるものの、グローバル化というキーワードで他章との紐帯を生む素材を提供している。

第Ⅲ部「産業集積と地域」では、経済地理学の中核ともいべき集積の議論が展開される。第10章（山本俊一郎）は、製造業の産業集積にかかわる理論を概説した上で、中小零細製造業企業の産業集積地域の事例が紹介し、それらが独自の競争優位を形成していくために社会文化的アプローチと無形資産活用の重要性を説いている。第11章（宇根義己）は、新興国における工業化の理論を押さえた上で、インドとタイの工業分散化政策を説明しているが、この章は第Ⅱ部の内容を

踏まえて読むことでより理解が深まるであろう。続く2つの章は、サービス経済化（第3章）を踏まえた議論が展開される。第12章（加藤幸治）は情報通信業が一極集中立地を示す要因を「地理的慣性」と「ヒエラルキー」という地理的概念から説明し、「東京一極集中」を最上位とする「三層の一極集中」を特徴とすることを示している。第13章（半澤誠司）は、近年の都市成長の鍵となる創造産業が示す産業群の解説と、それに関する議論を紹介している。この章は創造産業を分析する上でのデータの取り扱いを明示しており、今後の研究の参考になろう。第14章（佐々木達）でようやく第一次産業のテーマが登場し、食糧供給と農業地域のとらえ方が解説される。

第IV部「地域の持続可能性」では、産業の合理性や競争力に力点を置く研究テーマではなく、地域経済社会の持続的発展を探る素材が取り上げられる。第15章と第16章では、同じ執筆者（土屋純）により流通・商業の問題が扱われる。15章ではショッピングセンターが地域社会に与える影響を解説する中で、流通をプラットフォームとして理解するという考え方を提示している。それに対して16章は都市の中心性を支えてきた商店街の衰退と再生について議論し、その存在価値を問うている。第17章（中條暁仁）は、過疎化が進行する農山村の諸課題を概観し、移住など新たな農山村の地域像を創造する考え方として「農村空間の商品化」の概念を説明するとともに、人口還流現象として「田園回帰」の議論を紹介している。第18章（新名阿津子）は、観光・ツーリズムの概念を手際よく整理し、持続的な観光実践としてジオパークの事例を紹介している。観光産業の疾病による脆さを指摘した点も時機を得ている。最終章の第19章（伊藤達也）では、環境保全と地域振興の両立が検討される。これらは二項対立で語られるものではないというのが本章の主張であ

り、それに対してこれまで経済地理学がどのようなアプローチをしてきたのかを整理している。18章と19章は産業地理学中心の経済地理学に新しい知見を与える内容として注目されるが、他章との関連性が若干薄い（キーワードの行き戻りや章の配置など）印象を受けた。今後これらのテーマは、持続可能な地域社会における中心的課題として、研究蓄積が期待される分野である。

以上、各章とも先行研究のレビューが過不足なく冗舌にもなっていないにも関わらず、要点が抑えられているのには感心する。巻末にまとめられているように、まずこれを押さえておきなさい、という文献への気配りが細やかな書である。

一方で、テキストとしての本書の特徴は、単に「わかりやすさ」を強調しすぎず、読者に安易に迎合していないことである。「わかりやすく」説明することは、初学者を学問分野へいざなうには必要な配慮であるが、学ぶ者が自ら理解することを放棄することにもつながる。本書の文体は平易な表現で統一されているが、専門分野の研究価値を落とさず、これまで経済地理学が築き上げてきた議論を、可能な限り余すことなく説明しようとする執筆者たちの矜持を随所に伺うことができる。

本書はオイルショックやアジア通貨危機などの世界経済危機といった社会・経済の転換点を的確にとらえた体系的な経済地理学書と評価できる。現在のコロナ禍は、数年後どのようにグローバル経済や地域経済に変化をもたらすのだろうか。本書では取り上げられなかった福祉や生活といった視点も加えて、本書の続編にも期待したい。

（兼子 純）